平和研所内会議

2011 年 5 月 30 日(月) 開催
テーマ:「ブラジル」
報告者:国分克悦(主任研究員)

概要

1950 年代から「未来の大国」と呼ばれて久しいブラジルが、ここにきて再注目されている。USIMINAS に代表される、1950/60 年代の第 1 次ブラジル進出ブーム、カラジャス鉄鉱山開発等資源関連で盛り上がった 70 年代の第 2 次ブーム、ハイパーインフレ収束後の第3次進出ブーム、そして、米国発の世界景気後退をルーラ前大統領の下で乗り切った後から現在に至る第4次進出ブームと、徐々にスケールアップしたブラジルが、「未来の大国」という期待通りに発展していくか否かに注目が集まりつつある。

日本との時差が 12 時間あり、季節は正反対、国土面積は日本の 22.5 倍、資源が豊富で農牧畜業が盛んというように、日本とは共通点が少ないブラジルであるが、現在、ブラジルには日本人移民の子孫が 150 万人暮らしており、また、日本へのブラジルからの出稼ぎ者も 30 万人を超えるという深いつながりがあり、世界の国々の中でも日本に対する好感度が最も高い国の一つである。

筆者の研究の一貫した対象に、「日本の国益」というものがあるが、世界第 2 位の経済力を誇ってきた我が国は、自由貿易体制に重きを置き、「資源の取引先」は確保してきているものの、「資源エネルギーの確保」という面では非常に不安定であると言わざるを得ない。経済力で中国の後塵を拝することに成った我が国が、やはり将来に向けて、資源やエネルギーを買い漁る中国に伍して世界中に網を張ることは困難であるし、実際、日本の民間企業のネットワークも以前に比べて粗くなっているのが実情である。

そのような状況下、「我が国の資源とエネルギーを確保する」という観点から、焦点を絞って関係を構築するべき国の候補としてブラジルが挙げられるのではないかという点が今回の論点である。

今次発表では、「ブラジルなう」ということで、「累積債務国」、「ハイパーインフレの国」という、どちらかというと負のイメージがついて回ったブラジルの実情について、文献とインターネットを通じた情報収集を元に調査し、今後のブラジルの可能性と我が国との関係の在り方について論じた。

＜ブラジルなう＞

ブラジルの農業は、セラード地帯の開発が本格化して以降、大規模農場が効率の良い生産を行っており、現在、アグリビジネス生産額は、1500 億ドルを超え、GDP の 1/4 を占め、輸出額の3割を稼ぐ産業と成っている。主な輸出品としては、砂糖、コーヒー、オレンジジュース、エタノール、タバコ、大豆関連製品、牛肉、鶏肉が世界1位、トウモロコシ、

© Institute for International Policy Studies 2011

豚肉が第４位を占める。その内、穀物の生産・輸出には、穀物メジャーが主要な役割を果たしており、ブンゲ、カーギル、ADM、ルイス・ドレフィスの４大メジャー体制が確立している。問題点としては、①森林面積の減少、②大規模灌漑による水源の枯渇、③農薬による水質汚染、④モノカルチャーの営農リスク、⑤土地価格の上昇等が挙げられる。

エネルギーバランスの特徴は、水力発電とサトウキビ関連燃料等、「リサイクル可能エネルギー」が、45.8%である点である。サトウキビ関連エネルギーについては、アメリカの小麦やトウモロコシ等と比べても、生産エネルギー効率は高い。また、電力については、水力発電が 79.8%を占めていることが特徴として挙げられる。現状でも、ブラジルの豊富な水資源の 0.2%しか使用しておらず、今後も、大型水力発電所の建設が予定されている。ここでも環境問題との折り合いが注目されだしている。

鉱業・エネルギー資源については、これまでも豊富な国であったが、最近のトピックスとしては、石油生産が本格化し、２００７年より輸出国と成っていることで、ブラジルの主要輸入品目から石油が消えて、今後、現在開発中のプレサル油田の開発状況によっては、中近東の石油輸出主要国並みの大産油国となる可能性がある。その他、ニオブ、マンガン、タンタル、鉄、アルミニウム、マグネシウム、大理石、等世界有数の生産量、埋蔵量を有する鉱物資源が多く存在する。

鉄鋼生産量は、3000 万トン前後と世界８位、南米の 72%を占める。大豆は、米国と並ぶ大生産・輸出国。オレンジジュースは、世界最大の生産国・輸出国であり、日本におけるオレンジジュースの 80%はブラジル産で、砂糖についても世界第１位の生産国・輸出国である。よって砂糖のバイプロダクトであるアルコールも生産量が大きく、最近の環境問題を受けて注目が集まっている。

一方、ブラジルは１次産品のみならず、工業分野でも進んだ技術を有し、世界的に注目される産業が育ってきている。自動車については、現在、314 万台を販売しており、GM、FORD、FIAT、VW が主要な市場を押さえており、最近、韓国勢も攻勢をかけてきている。ブラジルの自動車の特徴は、「フレックス自動車」の存在である。これは、ガソリンとエタノールの混合率を自由に選択できるため、それぞれの燃料価格の動きにつれて消費者が燃料を選択できるため人気が高く、2009 年では、自動車登録の 92%がフレックス車と成っている。

航空機については、「エンブラエル」という小型航空機の生産で世界第２位企業が育ってきている。同社は、グローバル経営手法を取り入れて海外の有力航空機会社との共同開発体制を築いて、開発費用の低減、工期の短縮を実現している。また、バイオテクノロジーについても進んだ研究開発を行っており、製薬、農業、食品、環境等幅広い分野へ多数の研究者を輩出している。

＜一考察＞

資源・エネルギーに恵まれ、一次産品も豊富で、工業化も進みつつあるという隙がない

© Institute for International Policy Studies 2011

ように見えるブラジルも、「ブラジルコスト」と呼ばれる重い税負担、世界トップクラスの高金利、不備で効率の悪いインフラ、安定しない為替レート、企業にとって厳しい労働法の存在など、今後解決すべき課題は多々ある。また、前政権が「ボルサ・ファミリア」という貧困層の救済策を講じてきたことで不満が表面化していない、貧富の差も拡がりつつあり、都市部での治安の悪さに繋がっている点も緊急に取り組まなければならない点であり、ルセフ新大統領の下で、如何に諸課題を解決していくかに注目していく必要がある。

一方で、ブラジルは、世界を見渡してもそのポテンシャルとしては非常に期待できる国であることから、150万人の日系人という素晴らしい足がかりを有する我が国としては、国としての方針を明確にして、ブラジルとの関係の構築を推進する必要性を感じる。そのためには単発的な民間の交流ではなく、「ブラジル基金」のようなものを創設し、ブラジル関連で事業を展開する企業やベンチャーを支援する体制を敷いて、特に日本の弱い分野に進出して足場を確保していくことが重要と考える。

以　上

© Institute for International Policy Studies 2011